

## 『日本産育習俗資料集成』にみる育児 ～ 三重・福岡・熊本県を焦点に ～

柳園 順子

### 要 旨

かつて日本では全国地域ごとに、出産、育児に関する慣習としてさまざまな民俗があった。本稿は、現代の子育てについて児の生体リズムや養育環境、睡眠・生活リズム等を調査研究するに先立ち、日本人の出産、育児の多様な在り方や育児観、その根底にある意識を明らかにすることを目的とした。『日本産育習俗資料集成』（第一法規出版 1975 年）（以下「資料集成」）を主な資料に、生児の命を繋ぐ「乳」の意味や産婦の休養、共助、別火の場として機能した産屋や村落共同体における養育環境について整理し、特に三重・福岡・熊本県においてどのような習俗があったのか検討した。各地域の産育習俗をみていくことで、その歴史的背景を明らかにし、日本の風土で育つ現代の子育ての実像への接近を試みた。

**キーワード：**産育習俗、日本産育習俗資料集成、乳、休養、育児

### はじめに

近年、医学の急速な進歩、衛生思想の普及、母子手帳や母親学級、NICU（新生児集中治療室）を始めとする高度医療の恩恵等によって、多くの子どもの生命が助かるようになってきている。「7 歳までは神のうち」といった言葉が示すように、医療が発達する以前の日本では、生児はある程度の年齢まで成長して初めて村落共同体の一員として認められた。特に貧しい村落などでは、墮胎や間引きなども日常的に行われており、出産が施設化する以前は生まれたばかりの子どもの命を医療によって助けるという発想を持っていなかった（梅澤 2001）。

それゆえ、全国各地域には出産、育児に関する慣習としてさまざまな民俗があったことが、文化人類学や民俗学等の研究の蓄積により明らかにされている。戦後、これら民俗慣行と産育に関する古い慣習は消滅しつつあるが、日本の風土で育つ現代の子育ての真の姿を理解するには、こうした日本人の過去の姿に立脚することも重要である。日本における出産、育児の多様なあり方、いわば過去という時間軸を用いることで、現代の日本の出産環境を相対化し、より鮮明にその実像を浮かび上がらせることが可能となると考える。

産育習俗に関する先行研究では、助産師・看護師等の視点から、明治・大正時代からどのように妊産褥婦の生活が伝承されてきたのか、現在どのように影響を与えているのか等、妊娠・分娩・産褥期の生活を調査した西村らの研究がある。西村らは各地域にあるこれ

ら歴史的根拠をもとに、その特性を考えた生活指導を行うことが必要であると主張する（西村ら 2003）。日本では、かつて出産を穢れとし、産前から産後まで産屋・産小屋で過ごす地域もあった。各地域の産屋については、板橋や伏見が丹念な調査を基にその誕生から閉鎖までを明らかにするなどしている（板橋 2014、伏見 2016）。歴史学においては、沢山が中世の日本の子育てや家族観の変容を当時の膨大な史料から導き出している（沢山 2013, 2017）。また、変わりゆく出産の現場で産婆や助産師がどのようにかわってきたのか、助産の通史だけに留まらず「産み育て」「助産を受ける」女性の視点を含めて近代化に至るまでの変容を白井らが詳らかにしている（白井ら 2016）。これら先行研究をみると、産育習俗にはその時代や生活環境、食生活、信仰、その土地独特の慣習が大きく関与していたことがわかる。

家族社会学や社会学では、母性愛は近代の産物であることが自明のものとされている。例えば、フィリップ・アリエスは、伝統社会では「子どもは小さな大人」でしかなく、現代の私たちが抱く子ども観は近代の産物であることを当時の絵画等から論証している。高度経済成長期に子どもの問題が社会問題化していた日本でアリエスの主張は大きな反響を得、従来の子ども理解の相対化のための理論的根拠を与えたとされる。アリエス以降、子どもの問題への社会の関心と相まり、家族をターゲットとした教育政策が次々と打ち出され、家族は重要なテーマとして位置づけられていったとの指摘もある。女性学もまた、「産むこと」と「育てること」を区別し、出産をめぐる自己決定権を理論

化することで母性神話解体の取組に貢献したといえよう。

近年、リプロダクティブヘルス／ライツの認識が広く社会に浸透する一方で、妊娠・出産・子育てに関する迷信や慣習は、科学的根拠がないものについても今なお語り継がれている。こうした事象について山田は、性現象においては人類の期待が大きい反面、不安を伴うので人間の精神的弱味としていろいろな伝承のたっている隙がある、と指摘する（山田 1972）。このことは、いつの時代においても無事出産を終えたいという願いに変わりがないことを物語っていると思われる。

出産の場が医療施設化した現代において、妊娠・出産・子育てをめぐる不安や苦悩、ストレスを強化する因子を読み解くには、これら日本人の根底にある意識やその歴史的背景を知ることも重要である。本稿は、生体リズムや養育環境、睡眠・生活リズム等を調査研究するに先立ち、『日本産育習俗資料集成』（第一法規出版 1975 年）（以下「資料集成」）を主な資料に、歴史的背景として当該地域の産育習俗や育児観の根底にある意識の一端を明らかにし、同調査の基礎資料とすることを目的とする。そのため、本稿では詳細な時代区分は行わない。「自らの生命と生活を防衛するため、各時代に適応した衆知により創造してきた最低の抵抗線とも言える伝承」の概要について、調査対象の三地区（三重、福岡、熊本）に眼差しを向け、児の栄養、休養・育児、母になることを焦点に検討を試みたい。

### 1. 全国産育習俗調査

人類の発祥と共に、その時代や地域の背景により妊娠、分娩は繰り返されてきた。衣・食・住に関する伝承がどのように全国的に分布し、現代に受け継がれているのか、地域によってどのように異なるのか等、出産、育児に関する伝承を集結したのが、本稿が資料とする『資料集成』である。同書は恩賜財団母子愛育会（以下「愛育会」）によって刊行された。愛育会は皇太子殿下誕生に際し天皇陛下から「本邦児童及母性二対スル教化並ニ養護ニ関スル諸施設ノ資トシテ」下賜され、多額の基金を持って昭和九年三月に設立された（当時は恩賜財団愛育会）。愛育思想の啓蒙普及のために講習会・講演会の開催、図書の発行などを行ない、「愛育調査会」を設置していた。乳幼児の身体並びに精神の発達調査や出生率・死亡率と生活条件との関係、乳幼児保育方法など科学的調査研究に着手し、特に乳児死亡率の高い農山漁村に愛育村組織の指導を始めた。これら初期の事業の一つに民俗資料の調査収集があった。

愛育会は母子愛育の資料、民俗資料として、昭和 10 年 6 月に全国道府県在住の民族研究者等に委嘱し

て産育習俗を調査し、これら報告を『資料集成』としてまとめた。同調査は戦前、資料収集と整理はなされたものの、戦争によりその作業は中断せざるを得なかったという。終戦後 27 ヶ年の時を経て 1975 年に編纂された。調査細目は、以下のとおりである。

#### 妊娠、出産、育児に関する民俗資料調査細目

##### 一. 妊娠および出産に関するもの

1. 妊娠判明時に於ける各種の儀式、慶祝、贈答
2. 妊婦の住居、衣料、行動に関する禁忌、忌穢及其の期間、清祓の方法、忌言、及其の由来等
3. 安産の祈願、呪術、護符、俗信及習俗
4. 妊婦の修養、胎教に関する読物、民間伝承、縁起物及其他の習俗
5. 分娩場所、部室の位置、選定等に関する習俗
6. 出産時における特異の習俗、産室における禁忌、縁起
7. 初湯の使はせ方に関する特異の習俗及湯の始末
8. 胞衣、臍帯の処置に関する習俗
9. 産神（ウブガミ、ウブシン、ウノカミ）の信仰、祭り方、供物
10. 胎児の性別に関する俗信、祈願等
11. 妊娠及避妊に関する祈願、其の他の習俗等
12. 死産、早産、流産、妊娠中及産〇にて死せる女に関する俗信、処置
13. 明治以前に於ける墮胎及間引の風習の有無、有りとすれば其の方法、処置
14. 石婦（ウマヅメ）及結婚せざる女に関する習俗、信仰、伝説
15. その他妊娠及出産に関する特異の習俗

##### 二. 育児に関するもの

1. 出生後の儀式及慶祝日の名称、儀式、贈答
2. 宮参り及氏神、産土神等に就いての行事及信仰
3. 初生毛、初生歯に関する俗信、儀式
4. 初生児に関する禁忌、清祓
5. 母乳を豊富ならしめる為の祈願、呪術及其の方法、飲食物
6. 母乳以外の飲食物其の他の薬餌物等の種類、俗信

7. 乳母, 子守の選び方及之に関する習俗
8. 児童の訓育保健, 病氣治癒, 災難除去等に関する護符, 祈願, 呪言, 縁起物及その他の習俗
9. 貰子, 幼時に於ける養子の受ける社会的拘束, 禁忌, 待遇等
10. その他育児に関する特異の習俗

このように、多くの出産・育児にまつわる儀礼や習俗は、妊娠中と比較すると産後に特化している。このことは、妊娠中よりむしろ産後こそ産婦と新生児は大事にされるべき対象とされていたことを示唆している。産婦の産後と新生児が、丁寧に執り行われてきたことを伺い知ることができるのである。

## 2. いのちをつなぐ「乳」～児の栄養～

沢山によれば、江戸時代の史料には母の乳、人乳、女の乳、という言葉は出てくるが、母と乳を直接結びつける「母乳」という言葉は出てこないという。当時、捨て子<sup>注2)</sup>だけでなく、乳児たちも実の母以外の乳を貰って命をつなぐ場合もあった。すなわち、近代の人工ミルクのような有効な乳の代替がない時代には、女性の身体から分泌される乳は、乳児の命綱であり、人乳でさえあれば必ずしも母の乳である必要はなかったのである。沢山は、「母乳」「実母哺乳」が母性愛の象徴とされ、乳といえば「母乳」とする感覚は近代になって作られた、と指摘する。そのことにより「育児」そのものが乳を分けた実の母の役割へと閉ざされていった、と分析している(沢山 2017)。

『資料集成』にも、母乳の不足は牛乳のない時代には大変であったこと、幸い母乳を分与している婦人がある場合もあり、その際は乳親として一生その恩を謝するほどだったこと等が記されている。牛乳が地方の都市に現れるようになるのは明治末年以後であり、第二次世界大戦後に急速に地方の町村にも普及し、もらい乳の不便は無くなったとしている。

「乳付け」として生後他人の乳を与える地域も多くあった。例えば、生後4日目に生児が男児であれば女児を育てている母親に、また生児が女児であれば、男児を育てている母親から、乳をもらって飲ませるなどの習俗があった。これら「乳合わせの儀礼」を行った後、実母が授乳を開始したという。6日間または11日を経て床払いと称し、産婆を招いて産婦と新生児にお祝いの席が設けられるなどもみられた。『資料集成』をみると、三重県では「チチアワセ」として「3日目に乳を授けてもらうまで乳を与えない」[一志郡]「男児には女児の母の乳、女児には男児の母の乳を10日間飲ませる」[伊賀国]などの「乳付け」をし、壮健を祈っ

ていたことが確認できる。

乳は命を繋ぐ要であることから、その有無は切実な問題だった。三重県では出産時に産神を祀るだけでなく、産後は「乳もらい観音に参拝する」「乳母乳山神を信仰する」等、乳薬師・子安観音等に行き、乳に困る事がないよう祈願した。福岡県には「箱崎の日切地藏」をはじめとする母乳を豊富にするための祈願所が多数存在していた。また、分娩後の産婦は非常に疲労していることから、それを力づけるために各地域では特別の食物が用意された。主に里からの食物で、産婦に食べさせるものと生児に与えるものの2通りがあった(大藤 1968)。三重県では新生児に与える母乳を多くするために「鯉の味噌汁を食べる」ほか、「蓮根」「ごぼう」「こんぶ」「餅」「いも」「白味噌」等、特定の食材の摂取が推奨された。

『資料集成』には、福岡県で「八剣神社のいちょうの皮を煎じて飲む」等、いちょうや産湯に関する習俗が散見する。三重県では産湯を徳利や缶に入れ胎盤・胞衣に包んで埋めるなどしており、産湯には特別な意味が込められていた。熊本県では「玉名郡滑石村の諏訪神社へ乳の少ない者は参り、池の水をもらい飲み、のちに家の水を持ってお礼参りをする」などした。産婦には「甘酒」「鯉」「コチの頭」「家鴨の卵」の摂取が推奨されたほか、生児の栄養にミルクの代用品としてスリエ(米を水につけてすって、おもゆのようなものを作って砂糖を少し入れる)を使用していた。

西村らは、全国の広い範囲で乳汁分泌促進のため米の粉で作った団子汁を食べる伝承があったことを報告している。米は乳汁分泌促進に効果があることが広く知られていたようである。熊本県地域では、甘酒など少し飲むことで血液循環が良くなり乳汁分泌が促進するとして好んで飲んでいた。

## 3. 休養・育児～産屋を例に～

敦賀半島では出産の穢れにより女性たちは集落の産屋に隔離されて出産し、その後も一定の期間、産屋で過ごした。産屋に産婦の祖母などが食事を運んだり、話し相手をするなどしたという。産婦本人にとっても休養ができ、日常生活から切り離された休養の時間を意味していた。出産が済むと集落内の女性たちが産婦に食事などを見舞と称し届ける等の慣行は、全国各地で行われていた。地域の人々も共助の精神に基づく大変良い慣わしと考えていたようである。その理由として「お見舞いを持って行く際に産婦を気遣う会話をするし、上がり込んで懇談をして行くなど、そこには一定のコミュニケーションと育児に関する知識の伝承があった」ことを挙げている。当事者の産婦らも「お金の心配をすることなく何もしないでのもんぱりできた」



と産屋にいる期間を肯定的に評価していた。板橋は、こうした産屋の様相について、共助の観点が強調されるが本来は別火の習俗であった、と分析する(板橋2014)。

また、伝統的な産屋の一つに香川県観音寺市伊吹島のデーベヤ(出部屋)がある。昭和5年に「伊吹産院」という名称で新築したデーベヤの存続と閉鎖までの経緯については、伏見が丹念に追っている。表向きは「伊吹産院」だったが、地元の人たちはデーベヤと呼んでいた。デーベヤでの暮らしは、休養が全面的に強調された。島は畑作しかなく芋と麦だけで米は購入しなければならなかったが、親戚や友人たちが産屋に見舞いとして持参し、産婦は高級品である米を食べていた。おかずはイリコ味噌で、骨はカルシウムがあり健康に良いとされた。デーベヤに入り1週間経った頃に、身内の者がチヌ(黒鯛)を持参し、これを鯛めしにすると古血が下りとされていた。デーベヤを出るときには、デーベヤ仕舞いをし、見舞いに来てくれた人にご馳走を振舞った。各地域いずれの産屋をみても、見舞品の筆頭は米であり、産婦が米を食べると乳の出が良くなると贈答品として使われていた。

こうした産屋の多くは、集落の外れにあるというのが通説である。しかしながら、現地調査を実施した板橋は、集落の中央に立つ場合もあり再考の余地がある、としている。道行く人が産婦に声掛けしたり、女性達が交代で朝昼晩の食事を届けたり、共助の精神が発揮されていた。産屋で過ごす期間は各地域によって様々で、近代のデーベヤとも言える産屋のような産婦に休養の機会を与えるために新たに活用された地域もあった。例えば、三重県志摩市越賀のヒマヤには「産婦保養所」の看板がかけてあり、自宅出産して二週間後にヒマヤに移り、初産の場合は約二ヶ月休養した(板橋2014)。

産屋の発生は、神の加護を受けるための籠もりと考えられていた。出産の穢れが全面に出てくる過程で穢れを忌避する隔離施設としたことが、多くの先行研究では指摘されている。産屋は前近代的な穢れの強調であり、明治以後も続いた。近代化を目指す明治政府はこうした穢れの意識を払拭するかの如く、明治5年(1872)2月に「大政官布告(第五十六号)」の「自今産穢不及〇候事」という布告を出している。翌明治6年(1873)2月には「太政官布告(第六十一号)」で「自今混穢ノ制被廃候事」として、あらゆる穢れの習俗の廃止を通達した。これら政府による近代化政策によって、月経や産褥に対する意識は因習的なものとして次第に否定されていったのである(関沢2008)。

『資料集成』では、福岡県で「出産すれば1ヶ月は静養するように努める」等の習俗が記されている。こ

こでは「産婦に言語の労を取らせない」ようにすることや「産婦の心の平静を乱さない」ことが意識されていた。「出産の時、近所の人が集まり汚物を洗う」など産婦が休養できるよう、産屋でみられたような地域における共助があった様子も窺える。

産婦に対する手厚い援助の背景には、産後2週間ないし3週間保養後母親は早速労働しなければならない事情もあった。子守を頼む経済力のない家では、“いずめ”(藁製の桶)の中に乳児を入れ、作業場に連れて行ったり、桶の外にでぬよう紐でくくり無人の家にひとりぼっちで置いたりしていた。子守の苦勞に報いるため、子守りしてくれた人には子は一生“守り親”として使える地方もあった。

#### 4. 母親になること

女性にとって「母になること」は生理学的・本能的な変化ではなく、社会的な営みであることが社会学等の先行研究で指摘されている。ところが、現代では子どもができることによって、人は否応なしに親になることを求められ、特に女性は胎内に命を宿した時点から生物学的には母と呼ばれる存在となる。現代社会に生きる母親の全てが「母」という役割に適応しているわけではないことは、児童虐待等の現状からも明らかである。梅澤はこうした事象に対し、「妊娠」や「出産」と「母になる」ことの間にはある種の不連続性が存在している、と指摘する(梅澤2001)。

ここでは『資料集成』の次の記述に着目したい。

妊娠認知の初期に行われる身内の儀礼作法から、出産と同時に儀礼作法は次第に身内のそれに留まらず、部落<sup>マ</sup>内の組織や部落<sup>マ</sup>全体のそれへと拡大していき、7歳の子供組加入から、村の年中行事に参加するようになり、15歳になると若者組の一員となる。(中略)15歳若者入り成人大人待遇という習俗は、津々浦々辺〇に至るまで、一斉に行われて来たのである。(中略)妊娠・出産・育児並びに上記の成年(若者)への過程を見ると、祖人らが、一個の生命の発生から、その成育を確認していくそれぞれの段階であり、方法であったことがよく理解される。

このように、かつて医療が発達していない時代には、妊娠・出産・育児並びに成年(若者)への過程の各段階で、実に多くの禁忌や作法儀式が行われていた。地域ごとでさまざまな習俗があり、生児は各儀礼作法を段階的に経て成長するとともに、村落共同体の一員としての生活権を獲得していった。すなわち、身内の儀礼作法から次第に村の一員として認められるよう段階

を踏み、成人となることが求められていたのである。

それらを阻む異常出産に対するさまざまな伝承もあった。『資料集成』には、三重県では「初産に早産したり流産したりするとそれが習慣になる」〔鈴鹿郡〕「八ヶ月子は育つが九ヶ月子は育たない」〔鈴鹿郡〕とされたことが記されている。これに対し、福岡県では「七ヶ月子は育つが八ヶ月子は育たない」〔一般〕としている。いずれにせよ、早産に対する危惧があったことが読み取れる。三重県では「妊婦の家が生き物を苦しめるような職業、例えば狩人・魚屋などだと、死産・早産・難産などに陥りやすい」〔三重郡〕等、産婦以外にその起因を求めており「あまりに働きすぎて疲れたり、気づかれずると、死産または流産する」〔鈴鹿郡〕等産婦を労うものが多い。これに対し、福岡県では「早産・流産するのは梅毒性の妊婦である、または妊婦の不注意からである」〔直方地方〕〔三津猪郡〕〔若松地方〕と原因は産婦に起因するとしている。

育児に関する禁忌事項をみても、三重県では「生後3日以内に子を抱いて排尿させると末になって小便が近くなるのを防ぐ」〔四日市〕「赤子の襁褓を夜干しすると夜泣きする」〔伊賀国〕としているのに対し、福岡県では「あまり早くから起こさないこと」〔早良郡〕「初生児には直接光線をさける」〔企救郡〕など生児を護る事項が多い。このように、各地域別で比較すると、そのまなざしが異なることも確認できる。

生児の強壯を願い、強い動物の名を借りて名を付けたり、祖父母の名を継称することも多かったという。産育習俗の中には、当時の人々の知恵の豊富さが発揮されていたと。中には今日でも通用するものも至って多いことも最後に付記しておきたい。

### おわりに

本稿では出産、子育てに関する産育習俗の一部をみてきた。調査対象となる三重・福岡・熊本の習俗を比較すると、同じ日本でもその有り様は地域で異なることを確認した。

日本において出産が医療施設で行われることが一般化したのは戦後である。1966年に母子健康保険法にもとづく母子健康手帳が交付されるようになったことで、妊婦の段階からの病院への通院が一般化した。1950年の段階では自宅出産が9割を占め、住宅事情や妊産婦の栄養状態が極端に悪く、自宅出産は危険なものとしてGHQ（連合軍最高司令官総司令部）が医療施設での出産管理体制の強化を勧告<sup>注3)</sup>したとされる（梅澤2001）。

医療施設出産が定着するまでは、出産は場合によっては産婦や生児の命の危険を招く恐れもあった。本稿で確認したように、かつて日本の一部では産は穢れと

され、子どもがこの世に生まれてくるには神の助力が必要と考えられていた。産神や産飯など食物の力で生児の身と霊をこの世に繋ぎ止めようと、乳付けや初外出への禁忌、病弱の子は捨て子にした。子育ては食物が体や精神に大きな影響を及ぼすことも体験から知っていたのである。

出産が医療施設化するに伴い、妊産婦の生命の危険にまで晒してきた出産は安全なものとなった。その一方で、産ませる男性医師中心のものへと変容した（関沢2008）。かつては、各儀礼作法を段階的に経て成長する中で村落共同体の一員として生活権を獲得し、その過程で出産、子育てに関する様々な伝承や共助などが受け継がれていた。産屋のような産後母子が養生し、身体を守り、母と子になる場も用意されていた地域もあった。現代においては、こうした基盤が準備されないまま、否応なく「母となること」へと囲い込まれていく。出産、子育てに関する情報や休養も産婦自らの努力により獲得しなければならないものへと変化しているのである。指南なき出産・育児に命がけで臨む産婦の不安や苦悩、ストレスを強化する因子の背景には、こうした歴史の変遷、社会の変容があることも踏まえておく必要がある。

### 注

- 1) エドワード・ショータも母性愛は近代の産物であることを18世紀以来の育児事情の時系列データや当時の記録等から論証し、母性本能の神話性や母性愛本能説を否定した。
- 2) 捨て子にするのは子供が虚弱な場合であった。その他に、親の厄年に生まれた子を厄子とし捨て子にした。福岡県大島などでは女25歳の男児、男25歳の女児を産むと、その子は位が高いとし箕の中に入れ海や川に流し他家の人に拾ってもらうなどした。弱いだけでなく利口、キリウがよい、早く歩きすぎる等、その異常な能力がかえって子の将来に危難を招くのではないかという不安を持ってみられ、双子が生まれた場合も一たん捨て子にした地域もあった。（大藤ゆき著『児やらい産育の民俗』岩崎美術社1968）
- 3) 戦後、助産婦（1942（昭和42）年の国民医療法によって、名称が産婆から助産婦になった）に関する制度は、GHQの公衆衛生福祉局（PHW）の指導のもと大きく変化した。GHQは保健婦、助産婦、看護婦の三婦をアメリカ社会に馴染みの深い保健師という新たな概念にまとめようとしたが、助産婦たちの反対もあり、1947年7月に「保健婦助産婦看護婦令」が制定された。（安井眞奈美「出産環境の変容—＜第三次お産革命＞のために—」勉誠出版2014）

参考文献

- 1) 恩賜財団母子愛育会：日本産育習俗資料集成. 第一法規出版. 1975
- 2) 梅澤陽子：NICU（新生児集中治療室）の社会学. 黒田浩一郎編：医療社会学のフロンティア現代医療と社会. 世界思想社. 2001
- 3) 西村昌子編：妊娠・分娩・産褥期 今と昔の生活. ふくろう出版. 2003
- 4) 板橋春夫：産屋習俗にみるケガレ・共助・休養. 安井真奈美：出産の民俗学・文化人類学. 勉誠出版. 2014
- 5) 伏見裕子：近代日本における出産と産屋 香川県伊吹島のデベ屋の存続と閉鎖. 勁草書房. 2016
- 6) 沢山美果子：江戸の乳とこども いのちをつなぐ. 吉川弘文館. 2017
- 7) 沢山美果子：近代家族と子育て. 吉川弘文館. 2013
- 8) 白井千晶編：産み育てと助産の歴史 近代化の200年をふり返る. 2016
- 9) 山田文夫：妊娠・分娩と迷信と俗信・俗説. 助産婦雑誌. 1972
- 10) 大藤ゆき：児やらい産育の民俗. 岩崎美術社. 1968
- 11) 関沢まゆみ：現代「女の一生」人生儀礼から読み解く. 日本放送出版協会. 2008
- 12) 柴田純：日本幼児史—子どもへのまなざし. 吉田弘文館. 2013

本研究は JSPS 科研費 JP22K02477 の助成をうけたものです。

Child Rearing in the “Nihon saniku shuzoku shiryoshusei ”  
 (“Collection of Japanese Child-rearing Practices”)  
 ～ Focusing on Mie, Fukuoka, and Kumamoto Prefectures ～

YORIKO YANAGIZONO

Department of Nursing, Faculty of Nursing and Nutrition,  
Kagoshima Immaculate Heart University

**Keywords:** childbirth and upbringing customs,  
collection of materials on Japanese childbirth and upbringing customs,  
milk, rest, child rearing

**Abstract**

In the past, there were various folk customs related to childbirth and child rearing in each region of Japan. The purpose of this report is to clarify the various ways of childbirth and child rearing, views on child rearing, and underlying attitudes of the Japanese people, prior to conducting research on the biological rhythms of children, child rearing environment, sleep and lifestyle rhythms, and other aspects of child rearing in the modern era. Using “Nihon saniku shuzoku shiryoshusei” (“Collection of Japanese Childbearing Customs”, Dai-Ichi Hoki Shuppan, 1975) (hereinafter referred to as “Collection of Materials”) as the main source material, we have organized the meaning of “milk” that connects the life of a newborn baby and the child-rearing environment in the birth house and village community that functioned as a place of rest, mutual aid, and separate fire for the mother-to-be, and examined what kind of folk customs existed especially in Mie, Fukuoka, and Kumamoto prefectures. The following is a summary of the study. By examining the childbirth and child-rearing customs in each region, we attempted to clarify the historical background and to approach the actual image of modern child-rearing in the Japanese climate.

---